



ミシュレの女性メシア論 ジャンヌ・ダルクから魔女へ

坂本, 千代

(Citation)

近代, 76:65-79

(Issue Date)

1994-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001630>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001630>



ミシュレの女性メシア論

——ジャンヌ・ダルクから魔女へ

坂本千代

ジュール・ミシュレは歴史書だけでなく、博物誌的著作や、『女』『愛』『魔女』といった分類するのにいささかとまどうような作品を著した。また、彼の国家論、女性論等は二〇世紀末の我々にとってもかなりアクチュアルな問題提起をおこなっているように思われる。

本論では彼の女性観、その中でも特に彼の「女性メシア論」とでも名づけうるような女性論の形成をあとづけてみることにしたい。おもにとりあげるのは、一八四一年刊の『フランス史』第5巻中のジャンヌ・ダルクに関する部分、それに多少手を加えて一八五三年に単行本として出た『ジャンヌ・ダルク』、一八五四年の『革命の女たち』、一八五六年の『虫』、一八五九年の『女』そして一八六二年の『魔女』である。

I ジャンヌ・ダルク

ミシュレは『フランス史』第5巻中のジャンヌ・ダルクに関する部分で次のように言う。

「フランスの救世主は女性でなくてはならなかったのだ。フランス自身も女性だったのだから。」⁽¹⁾

ミシュレにとってのフランスは「祖国」(patrie)と同義語であり、つねに女性であった。人々がそこから生を受け、保護され、やがて愛し愛され、そのためには自分の命までかけるような存在、それが農民の正当な妻であり、労働者の美しい恋人であり、すべてのフランス人たちの母としてのフランスなのである。⁽²⁾

女性であるフランスの救世主、国民精神の化身でもあるはずのそのメシアが女性、それも若く美しい乙女であったのはミシュレには当然のこと、またそうでなければならぬことだった。なぜなら、イエスのごとく、メシアは最も軽蔑されうとんじられた人々の中から現れるのであり、それらの人々の夢と願望の体现者でなくてはならないからだ。百年戦争の時代、長い戦いと国土の荒廃で、王太子をはじめとする男たちがあらゆる試みに失敗し、くじけて望みを失っていたときに、それまで無視されていた民衆、その女たちのひとりが立ち上がったのである。ジャンヌ・ダルクは民衆、女、子供⁽³⁾という、ミシュレが非常に重視していた三つのグループに同時に属していたのであった。

それでは、ミシュレによれば、このフランスのメシアはどのような人物だったのだろうか。これを検討する前に、『フランス史』第5巻から三三年後の一八六四年に彼が発表した『人類の聖書』をまず見てみよう。そこには、キリスト教発生に関して、いかに「ユダヤの夢みる女たち」が深くかかわったかが述べられている。

「女たちは時が来たと信じていた。自分たちの中から大きな奇跡が起こるだろうと信じていた。その夢のために病気になる、そのためにまるでみごもったようで、子供を生むことを熱望していたのだ。」⁽⁴⁾

自分の夢によって病気になる、みごもってしまう。ミシュレによればこれこそ女性のイマジネーションの創造力なのであり、これらの夢見る女たちからイエスが生まれたのであった。また、キリストのよみがえりについて、ミシュ

レは次のように言う。

「聖ヨハネによれば、マグダラのマリアがキリスト復活のただ一人の目撃者であった。彼女だけが、その心の目で見た。世界は彼女の言葉を信じたのであった。」⁽⁵⁾

『人類の聖書』におけるミシュレの見解は、マグダラのマリアの真摯な願望、彼女の熱烈なイマジネーションがイエスをよみがえらせるといふ奇跡をおこなったというものである。

それではジャンヌ・ダルクはどうだったのだろうか。

「彼女は生ける伝説だった：しかしそれにもかかわらず生命の力は、高揚し凝縮されて創造的になったのであった。その若い娘は自分でも気づかぬうちに、自分自身の考えをいわば創造し、実現したのであった。彼女はそれらの思想から存在を作りだし、それらの存在に自分のけがれない生活の宝庫から輝く万能の生命をかよわせ、この世のじめな現実を色あせさせたのであった。」⁽⁶⁾

このように、ミシュレによれば、ジャンヌは高揚し凝縮された生命の力によって、自分自身の思想から「存在」をつくりだしたのであった。また、別の箇所で、ジャンヌの聞いた「天の声」を彼女の「良心の声」とみなすことによつて、ミシュレはジャンヌのイマジネーションが、天使たちの姿や神の声をつくりあげたのだとする立場をとっている。ジャンヌは自分自身のイマジネーションによつて「神」や「天使たち」を生んだのだと言ふこともできるであろう。⁽⁷⁾

ところで、ミシュレの描いたジャンヌの性格を見る時、彼はしばしば彼女の「素材さ」(simplicite)、「良識」(bon sens)とともに、「やさしさ」(tendresse)を強調している。やさしさというのは、感受性が豊かであること、他人へのおもいやり、あわれみの心である。ミシュレは言う。ジャンヌはそのやさしさゆえに、彼女のまわりの悲惨な状

況からフランスを救おうとしたのである、と。

「フランス人たちよ、つねに想起しよう。祖国はひとりの女の心から、彼女のやさしさとその涙から、彼女が我々のために流した血から生まれたのだということ。」⁽⁸⁾

このようにしてジャンヌはひとつの奇跡、それまでは単に地理上の名称でしかなかったフランスから国家を、祖国を生み出すという奇跡をおこなったのであった。

それではここで、ジャンヌがアルマニャックのあらくれ男たちをひきいてオルレアンにむかう部分を見てみよう。

「ロワール河に沿った路上に野天の祭壇をしつらえさせ、彼女はそこで聖体を拝領し、彼らも聖体を拝領した。季節の美しさ、トゥール地方の春の魅力が、この若い娘の宗教的な力を不思議に補ったにちがいない。彼ら自身も若返った。完全に我を忘れてしまっていた。彼らは過ぎ去った彼らの美しい時代のように、善意に溢れ、希望にみちていた。みんなが彼女と同じように若く、みんなが子供だった：彼女とともに、彼らは心をこめて新しい人生を始めた。彼女は彼らをどこへ連れていこうとしているのか。彼らにとってそんなことはどうでもよいことだった。オルレアンでなくとも、かりにエルサレムであっても、彼らは彼女に従って行ったことだろう。」⁽⁹⁾

ミシュレのジャンヌにはこのようにして巫女あるいは女司祭のイメージが現れる。彼女は「宗教的な力」を持ち、神と男たちのあいだの仲介者としての役割を果たしているのである。

以上で見たように、『フランス史』第5巻と『ジャンヌ・ダルク』には、フランスを救うのは女性であるというミシュレの女性メシア論の第一歩が現れている。それはここではジャンヌを指し示しているだけであるが、やがてこの概念が彼の中でどんどん大きくなっていく。ジャンヌの「女性的イマジネーションの力」「やさしさ」「あわれみ」そして「女司祭としての役割」これらはミシュレの女性論の重要な要素となっていくのである。

II 「革命の女たち」

一八五四年に出た『革命の女たち』は、ミシュレの女性観の進展という点からいうと、『ジャンヌ・ダルク』の次の段階に位置するものと言えるであろう。

この本で、ミシュレはまず革命期の天才や英雄たちの出生年に共通点があることを指摘し、その理由を考える。彼によれば、革命の英雄たちはなによりもまず彼らの母親の息子だったのである。その母親、一七六〇年ごろの若い女性たちに決定的な影響をあたえた本としてジャン・ジャック・ルソーの『エミール』をあげ、これが普及した時期、つまり女性たちが自分の手で子供を育て、母乳を与えることの重大さを認識した時期、もっと大きく言えば、「母性」を熱望するようになったところに彼らが生まれたとする。フランス革命の立役者たちはこのように女性の「母性」にたいする自覚によって生み出されたというのがミシュレの説である。これは、先に見た「女性のイマジネーション」による「神」の創造とほとんど紙一重の論法と言えるであろう。この本には、乙女ジャンヌをあつかった『ジャンヌ・ダルク』にはなかった「母性」や「母」の役割の重大さに対する考察が見られる。「母性」の問題はこれ以後のミシュレの女性論で大きな位置を占めることになるであろう。

さて、ミシュレによれば、革命を生み出したのは（そして、のちにはそれを殺してしまったのも）女性たちだった。『革命の女たち』の最初に登場するのはルグロ夫人¹⁰⁰である。

「（家族の圏外における）ヒロイズムへの女性の最初の登場は、予想されたとおり、あわれみのほとばしりによっておこったのであった。（…）彼女（ルグロ夫人）は、しっかりした良識によって、他の人々が見なかった、ある

いは見ようとしなかったものを見たのである。」¹¹⁾

ルグロ夫人の場合も、ジャンヌと同様、彼女の「あわれみのほとぼしり」(c'est de pitié)が英雄的な行動へと駆り立てたのであり、また、彼女もジャンヌのように「良識」に富んだ女性であったとされている。

そしていよいよ革命がはじまり、一七八九年一〇月六日のできごとの主人公は民衆の女たちであったことが述べられる。彼女たちの中でも、市場で働く女たちについてミシュレは次のように語る。

「これら市場の女たちは、貧困にあえいでいたわけではない。暮らしになくてはならぬ品々を扱っていたから、あまり打撃は受けなかった。しかし彼女たちは他のだれよりも不幸を見抜き、それを感じるのだ。つねに広場で生活している彼女たちは、我々のように苦しみを見て逃げだしたりはしない。人の苦しみにだれよりも同情を寄せ、不幸な人々にやさしくしてやったのは彼女たちであった。」¹²⁾

彼女たちはまわりにある苦しみを自分のことのように感じたのであり、あわれな人々の悲惨な状況にたいする同情が市場の女たちをヴェルサイユへとむかわせたのであった。

以上のように、『革命の女たち』の中で革命初期に女性たちの果たした役割に関する部分では、ジャンヌの場合と同様に、女性の「やさしさ」そして「あわれみ」が、みじめな現実を変革する奇跡を生み出す原動力としてとらえられているのである。

一八五六年以降に発表されたミシュレの一連の博物誌的著作は、一般に考えられている以上に、それ以前の彼の作品と思想的に深いつながりを持っているように思われる。とりわけ、一八五七年に出た『虫』と一八四六年の『民衆』には大きな共通点が見られる。それは「シテ」(cite、都市、国)の概念である。

「地球で作られる最高のもの、地球の住人たちのめざす最高目標がシテであるのは確かだ。それは、ひじょうに緊密な結びつきを持った社会のことである。人間以外の生き物で、この目標に達しているように見える唯一のものは、虫であることは確かだ。」⁹⁰

『虫』において、アリ、シロアリ、スズメバチ、ミツバチに関する章では、これらの生き物がほとんど雌のみによって「社会」(あるいはシテ)を作っているということが述べられ、その詳しい解説がくりひろげられる。

ミシュレによると、すべての始まりは子供を生み、その子たちを無事に育てたいという「雌の夢」(Le rêve de femelle)であった。ところで、彼の持つ「母」のイメージの二面性、母に対するミシュレのアンビヴァレントな態度は『虫』の中にも見いだせる。彼は「母」をふたつに分けるのだ。「生む母」と「育てる母」である。この本の中では「生む母」つまり女王バチや女王アリはひたすら卵を生み続ける女の生殖器そのもののおぞましさを描かれている。シロアリの母を見てみよう。

「彼女はここにいるだろう。死ぬまで、たまごを滝のごとく垂れ流し続けながら。それらは日夜集められ、明日は民衆になるだろう。(…)この恐るべき母親はその狂信的な害虫たちから熱愛されているように思われる。」⁹¹

ミシュレの考えでは、シロアリの社会において、たえまなくたまごを生み続ける「この恐るべき母親」(cette

terrible mère)「この繁殖器械」(cet instrument de fécondité)にたいする熱愛が、古代世界の人々の場合と同様、ひとつの信仰にまでなるのである。古代オリエントから、インド、エジプト、ギリシア、ローマにいたるまで、古い時代の重要な神々が女性、それも豊穡を司る女神であったことを思い出すべきであろう。さて、「育てる母」のほうはどうであろうか。一匹の女王、ほんの数匹の未来の女王およびひとにぎりの雄以外、アリアハチの社会には労働者の雌しかない。彼女たちは「シテ以外の夫を持つことのない峻厳なる乙女」である。そして、同じ母から生まれる子供たちの世話をし育てあげるのが彼女たちであり、処女でありながら、育ての母、教育者ともなる。これら働きの乙女たちは「共通の母親への信仰に精神的な支えを見いだす。それは、これらの処女たちのシテにおいて、愛の宗教のようなものである」と、ミシュレは言う。

このように彼は『虫』において、ある種の虫たちの「女性」という性のなかにある教育者あるいは育てる者としての側面を特に強調している。これは、彼の『民衆』で展開されたような祖国信仰と結びつき、女司祭として母なるシテに仕える処女たちのイメージとなっていくのである。

IV 『女』

一八五九年にミシュレは『女』を出版した。この本は「教育について」「結婚における女性」「社会における女性」の三部にわかれ、家庭や社会における女の役割や使命を扱ったものである。彼によれば、女性は月経によって宇宙のリズムに従っているのである。ゆえに、女は自然の一部として生きることを余儀なくされているということになる。

これは自分の理性を宇宙の中心に置き、自然の上に立ち、たえまなく世界を変えようとする傾向のある男性と対照的

な位置にある。『女』の中で作者は歴史の眞の担いてはその基部にある女性原理、生命を維持し愛と自然に生きようとするその原理ではないかと考える。彼はこれを、知性や人間の力にたいする信仰および自然を征服しようとする意志にもとづく男性原理と対抗させるのである。

このように、『女』においてミシュレは人間が自然と調和して生きることの重要性を説く。彼は自然の諸力とコミュニケートすることのできる女の特性をくりかえしほめたたえ、女性というものを神聖化する。彼にとつて、「女は一つの宗教」、「聖なる祭壇」である。彼は自然と男たちのあいだ、また神と男たちのあいだのやさしい仲介者あるいは司祭としての潜在的資質をあらゆる女性の中に認めるのである。

V 『魔女』

『魔女』の始めの部分で、やがて魔女となるはずの女は、若く、弱々しく無邪気な新妻として現れる。はじめて夫とふたりきりになった小さな家、森の中の粗末な小屋に住み、夫が一日中外で働いているあいだ彼女はここでまじめしく家事をし糸つむぎをする。一二世紀ごろの農奴の女の常として、栄養失調きみで夢みがちな彼女は、ひとりで糸をつむぎながら、ときどき小さなやさしい炉端の「精霊」(Genie)と語りあうようになる。

このいたずら者の小さな妖精、若い農奴の妻の忠実なしもべの生まれには二つの背景がある。一つは、キリスト教によって駆逐されてしまった異教の神々、民間伝承によってほそぼそと生き残った神々の末裔という出自。その一方では、この若い女の豊富なイマジネーション(恒常的な飢餓状態が夢遊病や幻覚状態を生み出す素地となり、ひとりである時間が長いということもそれを助長しているのだが)が生み出したものでもある。実際、その小さな精霊は彼

女にむかって言う。

「このぼくはいったい何でしょう？ あなたの小さな魂、思ったままを大きなそれに話しかけている……」⁰⁷

このかわいい精霊はやがてサタンとなるのだが、ミシュレは中世における魔女発生の基盤とサタン信仰に、異教信仰のなごりと、庶民の女性が自分の内なる声、秘めた願いを投影したものとという二重の性格を認めているのである。これは、男性を介さぬ、女性のイマジネーションによる受胎にたとえることもできるであろう。

「ただひとりで、彼女はみごもり、子供を生んだ。しかし、だれを生んだのか。うっかりすると思ひ違ひをしてしまふほど彼女に似た、もうひとり別の彼女自身だ。」⁰⁸

ところで、『魔女』における若い女と炉端の精霊の関係は、『人類の聖書』の MARIA とイエスの関係に奇妙にもたいへん似通っている。

「その孤独な女は自分の純潔な胸から自分の精霊、天使、若い魂が現れ出るのを見た。語りかける魂、生まれながらに教え、母親に、すでに彼女が知っているすべてのことを教える。(∴) 一二才で美しくなり、彼は全く彼女そのものだ。しかし、彼は彼女の教師、その教え、小さな博士なのである。彼女は彼を自分の前にすえて、その足下にひざまづく。」⁰⁹

処女 MARIA は、彼女の孤独なイマジネーションによって彼女の「精霊」(Genie)、自分の「甘美な反映」(doux reflet) を生み出したのである。「彼」は彼女がすでに知っていることしか教えないが、彼女の師となり、MARIA はその教えに従って行くことになる。ミシュレによれば、イエスの誕生とはこのようなものであった。

MARIA の場合も『魔女』の若い女の場合も、女のイマジネーションが奇跡を生み出したのだということができよう。「強力で確固とした宗教は、ギリシアの異教がそうだったように、シビラとともに始まり、魔女とともに終わる。」

美しい処女シビラが光に包まれてこの宗教をゆりかごでゆすり、それに魅惑と後光とを与えた。そのち、この宗教は失墜し、病氣となり、中世のまっ暗闇の中、荒野や深い森の中に、魔女によって隠されたのだ。彼女の断固としたあわれみの情がこの宗教を養い、まだ生き続けさせたのである。このようにすべての宗教にとって女は母であり、やさしい保護者でかつ忠実な乳母なのだ。神々も男たちと同じく、彼女の乳房で育てられ、そこに抱かれて死ぬのである。」²⁰

このように、ミシュレによれば、魔女はその母性的で「断固としたあわれみ」(pitié intrepide)によって古い異教の神々をかばい養ったのである。

さて、魔女にはもうひとつの側面、農奴たちや女たちにたいするあわれみと同情もあったということが述べられている。特に、魔女は農村で重要な役割を果たしていた。というのも、彼女だけが、教会によって禁止されていた薬草の秘密を知っていてそれで人々を救うことができたからである。この知識はのちに医者たちに伝えられて近代医学の基礎の一つとなるであろう。

ところで、『人類の聖書』にも見られるのであるが、ミシュレは『魔女』においてキリスト教(中世ヨーロッパにおけるそれ)が自然を切り捨てたという点を再三強調している。彼は言う。

「ローマ教会は自然を不純で疑わしいものとして捨ててしまった。サタンはそれをつかまえ、それでわが身を飾るのだ。」²¹

そして、魔女、つまりサタンの母でありかつ妻でもある彼女はとうぜん自然のがわに立つことになる。

「キルケにもまして、メディアにもまして、彼女は自然の奇跡の杖を手にしており、また、自然を助力者および姉妹としている。(…)司祭は充分に予測している。危険、敵、恐るべきライバルが、彼が軽蔑するふりをして

者、自然の女司祭のうちにあることを。」²²

ミシュレが『女』において女性の属性として認めたのと同じ役割、自然と人間を仲介する女司祭としての役割を果たす魔女のイメージがここに現れている。

以上のように、本書で魔女の特徴としてあげられたもの、すなわち彼女の創造的なイマジネーションの力、そのあわれみとやさしさ、また女司祭としての役割といったものは、本論の最初に検討したミシュレのジャンヌ・ダルクの性格とほとんど同じものであり、これはまた彼女が女性というものの本質としてとらえていたものであったことがわかる。

愛にみちたイマジネーションの力で「神」を創造してその司祭となり、あわれみとやさしさによって人々を結びあわせ、そして新しい社会をもたらすメシアとしての女。ジャンヌの場合は祖国というものをもたらし、魔女の場合はルネッサンスとその延長線上にあるフランス革命をもたらした。なぜなら、ミシュレの観点からすれば、魔女と彼女から生まれたサタンの働きで、キリスト教に支配された中世が終わってルネッサンスが始まったのであるから。この偉大な女性的力の認知、期待、崇拜が、彼の女性メシア論であると考えることができよう。

民衆の女と言う最下層の被搾取者たちの間から出て、敵たちには魔女とみなされたジャンヌのイメージは、『革命の女たち』『虫』『女』等の作品をへて、作者ミシュレの中でだんだんと魔女のそれへと進化していったのだと言えるかもしれない。

- (1) Jules Michelet, *Histoire de France, Oeuvres complètes* (以下OCと略す), VI, Flammarion, 1978, p.121.
- (2) Michelet, *Le Peuple*, Flammarion, 1974, p.141 参照。
- (3) シャンヌは、毎月終りななかつたころに証言をシモンには注目している。また、彼はシャンヌをしばしば *enfant* (子供) と呼ぶことがある。
- (4) Michelet, *Bible de l'humanité*, Chamerot, 1864, p.440.
- (5) *Ibid.*, p.444.
- (6) *Histoire de France*, OC, VI, p.63.
- (7) シャンヌの「奇跡」と「世」に関しては次の拙論がある。坂本千代、「シモンによるシャンヌ・タルク像」、『近代』No.71, 神戸大学近代発行会、1991, pp.35-48.
- (8) Michelet, *Jeanne d'Arc*, Gallimard, "Collection folio", 1974, p.41.
- (9) *Histoire de France*, OC, VI, p.72.
- (10) ホンパドゥール夫人に爆弾を送ったかどで、裁判を受けることなく三五年間牢獄に繋がれていたラテュード (Latude) という人物のために奔走し、一七八四年ついに彼の釈放を勝ちとった女性。
- (11) Michelet, *Les Femmes de la Révolution*, OC, XVI, 1980, p.364.
- (12) ハリの民衆が、マテルサントを占領し、国王一家をハりに連れて帰ったこと。
- (13) *Les Femmes de la Révolution*, p.370.
- (14) Michelet, *L'Insecte*, OC, XVII, 1986, p.440.
- (15) 次の論文を参照のこと。Laudyce Rétat, "Michelet et le Royaume des Mères", *Romantisme* No.50, CDU-SEDES, 1985, pp.83-96.
- (16) *L'Insecte*, OC, XVII, p.390.

- (1) Michelat, *La Sorcière*, Garnier-Flammarion, 1966, p.75.
- (2) *Ibid.*, p.37.
- (3) *Bible de l'humanité*, pp.432-433.
- (4) *La Sorcière*, pp.31-32.
- (5) *Ibid.*, p.38.
- (6) *Ibid.*, p.32.

参考文献

『ミケレ』

- Oeuvres complètes de Michelet*, Flammarion,
- Ⅲ, IV, V (*Histoire de France*), 1974, 1975, 1978.
 - XVI (*Les Femmes de la Révolution*), 1980.
 - XVII (*L'Insecte*), 1986.
 - XVIII (*La Femme*), 1985.
- Le Peuple*, Flammarion, 1974.
- Jeanne d'Arc*, Gallimard, "Collection Folio", 1974.
- La Sorcière*, Garnier-Flammarion, 1966.
- Bible de l'humanité*, Chamerot, 1864.
- 『ミケレ』
- Laudyce Rélat, "Michelet et le Royaume des Mères", *Romanisme* No.50, CDU-SEDES, 1985, pp.83-96.

ミシュレの作品の日本語訳

『ジャンヌ・ダルク』、森井真・田代保訳、中公文庫、一九六七。

『大革命の女性たち』(抄訳)、三宅徳嘉・山上正太郎訳、『世界の人間像』26、角川書店、一九六〇。

『女』、大野一道理訳、藤原書店、一九二一。

『魔女』上・下、篠田浩一郎訳、岩波文庫、一九三三。

(なお、本論におけるミシュレの引用の多くは右の日本語訳に坂本がところどころ手を加えたものである。)